

梁啓超のダーウィン学説の受容

王 佳 超

The Acceptance of Liang Qichao's Darwinian Theory

WANG Jiachao

Abstract

This paper aims to analyze the extent to which Darwin's theory was embraced by Liang Qichao and elucidate the influence this had on Liang's adoption of evolutionary ideas. The timeline of Liang Qichao's acceptance of evolutionary theory is dissected into two distinct periods: his domestic activities during the Reform Movement, and the period following his visit to Japan. By scrutinizing Liang Qichao's works, particularly those that engage with Darwin and his theories, we illuminate the unique ways in which he integrated evolutionary ideas into his discourse. The ultimate goal of this paper is to shed light on how Liang Qichao's interpretation of Darwin's theories shaped his own intellectual assertions.

Keywords: 梁啓超、進化論、ダーウィン、種源論

凡例

* 梁啓超の文章は基本的に『飲冰室合集』(中華書局、1936年)による。梁啓超の文章の引用は、特に記していない場合、『飲冰室合集』の該当頁数を記す。字数の関係により、中国語の文献は基本的に省略し、既出の翻訳又は筆者による翻訳のみを記す。ただし、第二章で記した比較の表は、検証の便を図るため、参考文献を原文のまま引用する。

はじめに

19世紀後半から20世紀の初頭まで、進化論は世界中に多大な影響を及ぼした。ダーウィンの『種の起源』(1859年)は、生物学において画期的な研究を開くとともに、社会思想および世界観まで及ぶ論争を巻き起こした。西洋から発信された進化論は、日本と中国に持ち込まれ、革命的とも言えるその内容は社会と思想文化に衝撃を与えた。

一方、中国での進化論の普及において、嚴復(1854-1929)の『天演論』(1898年)は最も大きな影響を及ぼした書籍とされている。周知の通りこの著書は、嚴復がハクスリーの著作である『進化と倫理 プロレゴメナ』(1894年)、および1893年のロマネス講義に基づいて、古風な文体を用い独特な翻案によって著した訳解である。

胡適(1891-1962)は、「『天演論』を読んだり、物競天択の文章を作ったりするということは、みなあの時代の風潮を物語るに足るものである。(略)嚴さん(嚴復)の文章は、あまりにも古雅なので、若者たちが彼から受けた影響は、梁啓超の影響程は大きくない」と述べている(胡適 1946: 87-88)。その回想によれば、結果的に中国の知識人の中で、大いに人気を獲得したのは、梁啓超の進化論思想であった。胡適によって指摘されたことは、嚴復の訳著の解説には高度な古典知識が要求されており、進化論の普及においては梁啓超の影響が大きかったということである。さらに読み取れることは、中国における進化論の普及は、嚴復と梁啓超に代表される二つのルートが存在していたということが窺える。

梁啓超による進化論受容についてはこれまで多くの研究が行われており、少なくない研究書において言及されている(村尾 1999a: 37-75; 佐藤 1996: 1067-1113; 蔣英豪 2006: 73-89; 川尻 2008a: 137-156; 朱琳 2014: 95-115)。梁の進化論受容について、『時務報』時代の「与巖幼陵先生書」また、その作品に言及されたスペンサー(Herbert Spencer 1820-1903)の学説や加藤弘之の言論から、梁が語っていた「進化論」は社会進化論であると見なされている(佐藤 1996: 1070)。

先行研究における梁啓超の進化論受容は、上記のように、社会進化論の受容という視点から展開されてきた。しかし、梁啓超が積極的に語っていた進化論は、社会進化論であるか、それともダーウィンの学説による影響であるかということは、彼の作品及び先行研究によって明らかにされているように、複数の人物の言説で示され、極めて複雑な構図となっている。梁啓超自ら「ダーウィンは一九世紀以後の思想をすべて、根底から一新した人物にはかならない¹⁾」と述べていることに照らせば、梁啓超によるダーウィן学説受容に関するさらなる研究の重要性は言を俟たないであろう。

1) 原文は梁啓超・林志鈞(1936b: 114)。翻訳は岡本・石川・高嶋(2020: 217)。

本稿は梁啓超のダーウィン学説の受容に焦点を絞り、梁啓超の進化論受容という過程において、ダーウィンの学説はどのように働きかけたのかを解明することを目指す。まず、梁啓超の進化論受容過程を変法維新时期つまり国内での活動時期と来日後の二つの時期に分けて整理する。次に、梁啓超がダーウィン及びその学説を取り上げている作品から、進化論がどのようにその言論に応用されているかその特徴を浮き彫りにさせる。上記の方法によって、梁啓超がダーウィンの学説から読み取った内容がどのようにその主張に反映されていたのかを明らかにすることが本稿の目的である。

一、『天演論』、「春秋三世説」と「物競天択」、「優勝劣敗」

梁啓超の進化論受容を議論する際には、嚴復の『天演論』に言及する必要がある。『天演論』の出版は当時の中国人ないしそれ以降の数十年において、大きな影響を与えていた。勿論梁啓超も嚴復の訳著に影響された知識人の一人であると言える。『天演論』が正式に刊行される前に、嚴復はその草稿を梁啓超が主筆する『時務報』に、その活動に期待するという意図を込めて、『天演論』を寄稿した（村尾 1999a: 42）。草稿を読んだ梁啓超は、嚴復宛の書簡『与嚴幼陵先生書』の中で、嚴復の学問に刺激され、感心させられたことを以下のように示されている（梁啓超・林志鈞 1936a: 110）。

南海（康有為）先生が大作を読まれた後、未だこれほどの人を見たことがないと言われた。穂卿（夏曾佑）は、どう言ったらよいかわからないと感服させられた。しかし、「択種留良」の論について、完全に賛成とは言い難く、その内容は少々特別であった。大著に書かれた言説も啓超たちは、南海先生から聞いたことがあった。十分に理解できなかった。南海先生に、君たちは驚いてこの新たな理論を疑わしいと思うことをしない、西洋人はこの学問に関した何人も何年も治めてきたと言われた。ご高著を頂いた以上、この上なく喜んでいる。啓超が南海先生から拝聴したこの説と異なるものは、二つほどある。一つは出世のこと。もう一つは、この本に書かれた理論を以て複雑に展開することである。また南海先生は、必ずしも西洋人の学説とは一致するのではない。後に穂卿から頂いた手紙に、先生（康有為）が言ったスペンサーの説は、幼陵先生の著書よりよいと書かれていた²⁾。

村尾（1999a: 42-45）は、この手紙を送る背景として、梁が嚴復へ『天演論』の寄付に対する返信をしていなかったため、王修植が汪康年を通じて催促を行っていたと言及した。書簡の内容において、最も大きなスペースが割かれているのは、『時務報』第十冊に掲載された「古議

2) 書簡は1896年に書かれたものである。翻訳は筆者による。

院考」をめぐる支援であったと指摘した。

また、この時点で梁啓超は、社会進化論代表的な人物であるスペンサーに関する情報を康有為経由で、ある程度把握していることも読み取れる。但し、梁は嚴復の訳著とスペンサーの学説に、一部理解できない、違和感を覚えているという意味を表明していた。特に嚴復の訳著の中で主張された「択種留良」という「選択」・「淘汰」のことに賛成できないという梁啓超が『天演論』を疑問視している所が窺える。

「古議院考」をめぐる梁啓超と嚴復のやり取りで、梁は西洋の富強は議院制によらしつつ、中国の古典を引用して、中国にも西洋の議院制に対応する士大夫・庶民が存在したと主張した。嚴復はこの指摘に対して、進化論の観点を用いて反対し、梁の主張は誤解を招くものであるとした(村尾 1999a: 43)。嚴復の見解の中で、西洋文明の歴史においては、君主制と貴族による共和制及び国民による民主制が存在していた。嚴復によれば、西洋の民主政治の発達は、胚胎(ギリシャ・ローマの時代)から始まるものであり、今の民主政治はその完成体として進化した結果である。嚴復は、梁啓超の主張は大衆に誤ったことを伝えてしまうので、このような附会説を戒める必要があると指摘した。これに対する梁啓超の返信では、民主政治は西洋のみに存在するものではない。中国の政治はいずれ民主制へ進んでいくという意味が表明された(村尾 1999a: 43)。

さらに、この嚴復宛の書簡で梁啓超が言及した「春秋三世説」も、彼の進化論受容を考察するうえで重要な手掛かりとなる。書簡から垣間見えるように、この時点で梁啓超はスペンサーの学説についてある程度の情報を把握していた。書簡の中で言及された「春秋三世説」は、梁の師である康有為が提出した大同思想であった。だが、康有為の大同思想を収録した『大同書』は、成書された年代について諸説があって、梁啓超によれば、『大同書』は湖南にいた頃すでに万木草堂の生徒たちに大きな影響を及ぼしたと書かれている(梁啓超・小野 1974: 272)。

「春秋三世説」は、康有為が『春秋』の「三世」原理によって『礼運』³⁾を著し、「天と人の関係をみきわめ、自ら一学派を創設して天下の経論に役立てようとしたのである」(梁啓超・小野 1974: 260)。康有為は「三世」則ち、「捩乱世」「昇平世」「太平世」と区別し、「大同始基之捩乱世」「大同漸行之昇平世」「大同成就之太平世」という三つの段階を順次に経て進行していくと考えている(曾村 1963: 15)。具体的に「大同世界」に入る方法は、以下のように示されている(曾村 1963: 7)。

第一に、国界を去って大地を合する。第二に、級界を去って民族を平にする。第三に、種界を去って人類を同じくする。第四に、形界を去って独立を保つ。第五に、家界を去って

3) 康有為が著した『礼運注』。康の自叙によれば1884年に完成したという。その内容は、康有為が寥平とヨーロッパ進化論を否定し、独自の学説を誇示するために、故意に制作年代を遡らせたもの、制作年代は1896～1898年、『孔子改制考』の刊行時期にほぼ近いとされる。梁啓超・小野(1974: 265)を参照。

天民となる。第六に、産界を去って生業を公にする。第七に、乱界を去って太平を治する。第八に、類界を去って衆生を愛する。第九に、苦界を去って極楽に至る。

ここで注意すべきところは、梁啓超が最初に出会った進化論的な論説とされる「春秋三世説」は、進化派の哲学から世の中は進歩していくという視点を取り入れたものであり、進化論そのものではない、という点である（竹内 2008: p. 188）。康有為の「春秋三世説」の中で特に強調されているのは、「現在は『拋乱の世』であり、小康を言うことができるのみで、大同を言うことはできない、言え、天下を洪水猛獣の中におとし入れることになるであろう」ということである（梁啓超・小野 1974: p. 263）。この段階を経て直線的指向性が内包される「春秋三世説」の考え方、つまり、人間社会の歴史は一定の目標に向けて進めていくという思考として見て取れる。

康有為のテキストで「拋乱の世」は、以下のように理解されている（邱偉雲 2015: pp. 119-120）。

各国人民の権利は不平等である。甲国の奴隷が他国へ逃げて、奴隷でなくなる。各国において奴隷はあるが、徐々に自由な身分になっていく。爵位は世襲され、貴族、平民、奴隷の区別がある。族は貴賤の等級があつて、仕官になる制限はあり、賤族は仕官になれない。一夫多妻制、男性を中心とし、すべては男子に所有される。黄・白・棕・黒の体格、長短、強弱、美悪がはるかに違っている。宗主国と属部の人民の貴賤ははるかに違っている。奴隷の売買は許される⁴⁾

本稿は、梁啓超の進化論受容について論じることが目的であり、「春秋三世説」の公開と中国の思想史における意味に関してはこれ以上論じない。また、「大同世界」あるいは大同思想は、康有為だけのものではなく、孫文と中華民国時代で強調された三民主義思想からも読み取れる指摘されている（曾村 1963: 3）。

上述のように変法維新期の梁啓超は進化論について、断片的とは言え康有為が言及したスペンサーの学説さらに康の「春秋三世説」、そして嚴復の『天演論』、という三つのルートから、進化論あるいは社会進化論について情報を獲得していた。この時点の梁啓超は、康有為の学説を全般的に受け入れたが、『天演論』の「択種留良」という「選択」・「淘汰」のメカニズムについて、嚴復への書簡で述べたように、同意できないという態度が容易に読み取れる。

しかし、変法維新の失敗を経て、日本へ亡命した梁啓超は、代表作『新民説』の中で、進化

4) 出典は邱偉雲（2015: 119-120）、「大同合國三世平等進程表」及び「人類平等進化表」より、翻訳は筆者による。

論を高く評価し、進化論はその政治主張を証明する理論にも用いられた⁵⁾ (梁啓超・高嶋 2014: 33-45)。来日後の梁啓超は、はっきりと「適者生存」「優勝劣敗」⁶⁾ という「選択」・「淘汰」の意味が含まれる言葉を取り上げている。これらのキーワードを取り上げて進化論を度々言及する変化は、「選択」と「淘汰」の概念を受け入れた象徴と言える。

梁啓超は進化論あるいは生物学の知識への関心を示す資料について、『梁氏飲水室蔵書目録』⁷⁾ (以下『目録』と略記) が挙げられる。『目録』では500冊にも及ぶ日本語蔵書⁸⁾ が記録され、具体的各部門の蔵書をカウントしたものが『『目録』(日本語蔵書)』である。

表一 『目録』(日本語蔵書)⁹⁾

分類	哲学	宗教	自然科学	社会科学	史地	語文
部数	75	207	19	66	59	31
合計	457					

国立北平図書館編『梁氏飲水室蔵書目録』付録二 p547、599より作成

表二 『目録』(日本語蔵書) 自然科学

題名	著者・訳者	刊行所	発行年	部数	備考／筆者訂正
『科學概論』	田邊元		大正七年鉛印本 (1918年)	1	
『科學の價值』	佛國アンソポアン カレ撰、田邊元譯	岩波書店	大正九年鉛印本 (1920年)	1	『科學の價值』 アンリ・ポアンカレ 著、田邊元 訳
『最近の自然科学』	田邊元	岩波書店	大正五年鉛印本 (1916年)	1	1915年刊行
『現代科學の基礎』	○國ロバード・ケ ネデーチェンコン 撰、小野寺一雄譯	大日本文 明協會編 印	大正十年鉛印本 (1921年)	1	『現代科學之基礎』 ロバート・ケネ デー・デュンカン 著、小野寺一男 訳、大日本文明協會事務所、1921年
『近世物理學講義』	池田清、田江良平撰		明治三十九年鉛 印本 (1906年)	1	高岡書店刊行
『アインシュタイン と相對性理論』	石原純	改造社	大正十年鉛印本 (1921年)	1	? 不明
『アインシュタイン 相對性原理講話』	桑木或雄、池田芳 郎共譯	改造社	大正十一年鉛印 本 (1922年)	1	『アインシュタイン相對性原理講話』 桑木或雄、池田芳郎 訳、岩波書店、 1921
『種之起原』	英國ダーウィン撰、 日本開成館譯	開成館	明治三十八年鉛 印本 (1905年)	1	『種之起源』 丘淺次郎監修

5) 初出は『新民叢報』第4号(1902年3月24日)。

6) 初出は『新民叢報』第1号(1902年2月8日)。原文は、梁啓超(1936b: 114)、岡本・石川・高嶋(2020: 217-218)を参照。

7) 国立北平図書館編『梁氏飲水室蔵書目録』、梁啓超の遺言で、その遺族から当時の北平図書館(現在は中国国家図書館)に贈与され、2005年に北京図書館出版社によって再版された。

8) 『目録』(2005): p. 3、「出版説明」を参照。

9) *Ibid.*, 547-599より作成 ★前掲、『梁氏飲水室蔵書目録』、547-599頁より作成★

『生命論』	永井潜		大正四年鉛印本 (1915年)	1	『生命論』永井潜 著. 洛陽堂, 1913年
『生體論』	日本ヂセシクロ フ撰、石川千代松 譯	大日本文 明協會	大正十一年鉛印 本 (1922年)	1	『生體論』ヂャック・ローブ, 著宇 田一 訳. 大日本文明協會事務所, 1922年
『生の神秘』	英國スタンリイ・ド ・フラス印、武者 金吉譯	大日本文 明協會	大正十年鉛印本 (1921年)	1	『生の神秘』スタンリイ・ド・ブラ アス 著, 武者金吉 訳. 大日本文明 協會事務所, 1921年
『遺傳』	英國ジンアーサー ・トムリン撰、丘浅 次郎譯	大日本文 明協會	大正三年鉛印本 (1914年)	1	ジョン・アーサー・トムソン 著, 安 藤喜一郎 訳. 大日本文明協會事務 所, 1914年
『遺傳論』	山内繁雄撰	大日本學 術協會	大正五年鉛印本 (1916年)	1	『遺傳論』山内繁雄 著. 大日本學術 協會, 1915年
『人類の遺傳』	山内繁雄撰	大日本學 術協會	大正六年鉛印本 (1917年)	1	『人類の遺傳』
『人間の進化』	石川千代松撰	大日本學 術協會	大正六年鉛印本 (1917年)	1	
『百歳不老』	英國ラブリンスミ ス撰、武者金吉譯	大日本文 明協會	大正十二年鉛印 本 (1923年)	1	ラブソン・スミス 著
『動物社會』	石川千代松撰		明治三十七年鉛 印本 (1904年)	1	『動物社会』石川千代松 著. 富山 房, 1903年
『動物の共棲』	石川千代松撰		明治三十六年鉛 印本 (1903年)	1	富山房刊行
『海陸の神秘』	英國イーレーラン ケンスター撰、日 本武者金吉譯	大日本文 明協會	大正十一年鉛印 本 (1922年)	1	ランケルスター 著

国立北平図書館編『梁氏飲氷室蔵書目録』付録二 p576、579より作成、備考は筆者より訂正し補足

表一が示すように「自然科学」関係の書籍は他の部門と比べて蔵書数が少ない項目であった。しかし、「自然科学」部門の蔵書の明細表から見れば、生物学と進化論と生物学関係の書籍が占める割合が最も多かった。これらのことを踏まえて、梁啓超が「自然科学」に向けられた関心には、明確な指向性が存在するということが分かる。

表二から見られるように、自然科学の項目の中には日本で進化論の普及に大きな役割を果たした石川千代松 (1860-1935) や丘浅次郎 (1868-1944) が監修したダーウィンの原著の翻訳である『種之起源』も含まれている。だが、上記の書籍が刊行された時期は、いずれも梁啓超が日本の進化論を受容した¹⁰⁾以降に出版されたものであった。梁はこれらの書籍によって進化論を受け入れるとは言えない。だが、梁啓超の進化論受容の結果と見なし、「進化論」に向かう梁啓超の関心の所在を映し出す鏡となると考えられる。

一方、中国で *On the Origin of Species* の翻訳は、馬君武 (1881-1940) による行われ、梁啓超が主導した『新民叢報』で『物種原始』のタイトルで公刊された。1919年に刊行された『達爾文物種原始』の「序詞」では、馬君武は『物種原始』の翻訳に言及しながら、*On the Origin*

10) 朱琳 (2014): 103を参照。

of *Species* の再翻訳について以下のように、述べている（馬君武 1936: 1）。

第一巻の旧訳を見直して、間違いは多すぎだった。慚愧に堪えないが、それは予が二十二歳にやったものであった。博物学の知識もごく普通の程度で、英語の間違いも多かった。この旧訳も二度と使えないため、以前に翻訳した五章も改めて翻訳し直すことにした¹¹⁾。

この「序詞」から読み取れることは、『新民叢報』で掲載された『物種原始』は全訳ではないことである。馬君武は二度目の *On the Origin of Species* の翻訳につれて、旧訳を再度確認した上で、二度と使えないという判断に至った。文脈から『達爾文物種原始』と『物種原始』は、馬君武が英語の原著を使って翻訳を行ったと読み取れる。しかし、李冬木（2013a: 100）はこの『新民叢報』で掲載された『物種原始』は日本語訳著から二重翻訳したものであると指摘している。李冬木（2013a）によれば、馬君武の『物種原始』が依拠した書籍について、魯迅が『翻訳のための弁護』（1933年）のなかで、二重翻訳の例として示されていたのである（李冬木 2013a: 98）。

ダーウィンの『種の起源』は、日本に二種類の翻訳本（立花訳と開成館訳）があり、先に出了（立花訳）のはすこぶる間違いが多く、後に出たもの（開成館訳）がよい。中国では馬君武博士の訳した一種類の翻訳しかなく、しかも彼の基づいたのは日本の悪い方の訳本で、本当は別の訳本が必要である

『物種原始』に関しては李冬木（2013a）の研究がよい参考となる。ただし、李氏の考察は魯迅の進化論受容に絞られており、日本と中国の進化論受容の歴史について全面的な研究ではない。確実に言えるのは、『新民叢報』に連載された『物種原始』が日本語訳本の重訳である。

間接的あるが、梁啓超が主導する『新民叢報』に掲載された翻訳が基づいた訳本は、梁の進化論受容との関係性は無視できない。この時期の梁啓超はすでに日本語を経由してダーウィン評伝を含めた一連の西洋思想家を紹介する論説を発表していた。梁啓超が把握したダーウィン関係の情報は、馬君武が参考した日本語の訳本によるものという可能性は梁の進化論の受容を探る手掛かりとなる。

来日以前の梁啓超は嚴復が紹介した生物進化論につながる「択種留良」に、同意できないという意見を示していた。だが、来日後の梁は、転向を彷彿とさせるように、「物競天択」「優勝劣敗」「天演」などの言葉を頻繁に用い、大きく進化論に関心を向くようになった（梁啓超 1936c: 12-18）。さらに、梁啓超のダーウィン評伝「天演学初祖達爾文之学説及其略伝」は康有為の学

11) 馬君武（1936: 1）「序詞」より引用、翻訳は筆者による。

説を離れ、進化論を完全に受け入れた象徴であると指摘されている（朱琳 2014: 103）。

梁啓超のダーウィン評伝の分析を展開する前に、まず梁啓超が来日した明治後期において、進化論の流行とその背景について、確認しておきたい。この時期日本における進化論はスペンサー学説中心の国家・社会間の関係として捉えられ、すでに生物学から離れた論説であると指摘されている（渡辺 1976: 111）。しかし、「時代を明治後期に限定した場合、進化論熱は明らかに社会進化論の流行でなく、ダーウィンの生物進化論・人獣同祖説の流行という相貌をとっていた」（右田 2009: 27）。右田（2009: p. 27）によれば、この時期におけるダーウィンの進化論はスペンサーの学説より上回って、二十世紀はじめの日本社会に与えた影響がさらに大きなインパクトを及ぼしたと指摘したそして、この明治後期のダーウィン進化論熱は、来日後の梁啓超が進化論を受容していく背景と言えるのである。

二、日本の進化論移入史と「天演学初祖達爾文之学説及其略伝」

梁啓超がダーウィンとその学説を言及した文章は、先行研究に指摘されたように、社会進化論を踏まえたものである（佐藤 1996: 1067-1113；川尻 2008a: 137-156；朱琳 2014: 95-115）。梁啓超がダーウィンの学説を紹介した『天演学初祖達爾文之学説及其略伝』¹²⁾を見れば、その内容はダーウィンの進化論を中国に普及さらに応用させようという意図が込められていた（梁啓超・林志鈞 1936c: 17-18）。けれど、文章の中で用いられた動物あるいは家畜の事例は、明らかに生物学よりのものであった（梁啓超・林志鈞 1936c: 14-15）。本章では、梁啓超が日本語経由して、生物学関係の書籍から進化論を受容した可能性を意識する上、日本において進化論が普及されていく歴史と著作回顧しながら、梁啓超のダーウィン評伝『天演学初祖達爾文之学説及其略伝』を分析する。

日本における進化論受容は周知の通り、E・S・モース（Edward Sylvester Morse, 1838-1925）の東京大学での講義であるとされている。後にモースの講義は、その弟子にあたる石川千代松（1860-1935）によって本と整理され、『動物進化論』（1883年）の題で出版された。また、日本で最も早く進化論に言及した文献は、葵川信近の『北郷談』（1874年）に遡る（渡辺 1976: 110）。

東京大学でのモースの講義に続いて、フェノロサ（Ernest Francisco Fenollosa, 1853-1908）によってスペンサーの社会進化論を中心とする講義内容が行われた。一方、生物学関係の刊行物に関しては、神津専三郎（1852-1897）の『人祖論』（1881年）、伊澤修二（1851-1917）が翻訳した『生物原始論』（1879年）数種の訳著が挙げられる。しかしながら、この時期の進化論に関する刊行物の数は、スペンサーの理論を紹介した書籍が圧倒的に多かった（渡辺 1976: 110）。このような背景において、ダーウィンの *On the Origin of Species* が1859年にイギリスでの刊

12) 初出は、『新民叢報』第3号（1902年3月10日）「学説」の欄、署名は中国之新民

行から、日本で広く行き渡るまでには、ダーウィンの著述に関して英語の著作によらなければならない状態が数十年継続していた。

この状態が終わったのは、1896年に刊行された『生物始源 一名種源論』（経済雑誌社1896）によるものである。翻訳者は当時帝国大学英文科出身の立花銑三郎（1867-1901）であった。但し、訳者の立花銑三郎に関する資料はそれほど多くない。同じ英文科出身の夏目漱石（1867-1916）は『満韓ところどころ』の中で、立花は「余と前後して洋行したが、不幸にして肺病に罹って、帰り路に香港で死んでしまった」（夏目 2016: 32）。

この訳著は立花が単独で翻訳を完成したものではなく、伊沢多喜男（1869-1949）と長浜盛三も関与していたことが指摘されている（溝口 2010: p. 50）。巻頭の序文は、植物学者である伊藤篤太郎（1866-1941）がダーウィンの生涯と当時進化論ないし生物学研究の動向と進化論に関する一連の著作も挙げられていた（ダーキン／立花 1896: 20-40）。さらに、この訳本は李冬木（2013）が指摘した馬君武の『物種原始』に使用された種本でもあった。

立花が *On the Origin of Species* を翻訳するきっかけは、文系インテリ層は自らが信奉する教義の正しさを訴えていく上で、科学理論を頻繁に援用ということである（右田 2009: 26）。訳著の前書きでは、立花の進化論を思想的哲学として受け入れるべきという立場が明確に示されている。

本書は実に現世紀思想の大潮流を左右せしもの、若し単に生物一科の著書に過ぎずと為す者あれば、是れ未だ其価値を知らざるなり。カントの哲学を読む者は必ずニュートンの影響如何に大なりしかを知らん。余輩哲学の私淑する者にして本書に興味を有するは之が為なり¹³⁾。

この序文から読み取れるように、明治後期進化論をめぐる討論は、生物の進化とアナロジーから社会を論じており、その内容は相変わらず社会進化論的な考え方が根強いことが読み取れる。しかし、ここで注目したいことは、進化論の理論はスペンサーの学説からダーウィンの学説へと移行することである。右田（2009: 28）によれば、「明治後期の知識人が、ダーウィンとダーウィンが書いた生物進化論書（特に『種の起源』と『人間の由来』）に、熱烈な愛情と崇拝を示した」。

1902年に丸善はその広報誌『学燈』において、当時の学者や有力者を対象として「十九世紀に於ける欧米の大著述」の推薦を主題にしたアンケートが実施された。結果的に『種源論』はスペンサーの『総合哲学』を上回って一位を獲得した（丸善株式会社 1980-1981: 460-466）。このアンケートからは当時の学者と知識人たちがダーウィンに大いなる関心を向けていたことが

13) ダーキン／立花（1896）: 1、「例言」より引用。

容易に読み取れる。

アンケートの結果が公開される同年の3月に、梁啓超は「天演学初祖達爾文之学説及其略伝」を、彼の執筆する『新民叢報』に掲載した（梁啓超・歐陽紅 2008: 283-292）。4月に刊行した第六号で、ダーウィン、ハックスレー、スペンサーの肖像画が載せられている¹⁴⁾。時期的に、梁啓超は『学燈』に載せたアンケートとその調査結果を読んだことも推察できる。上記のことを踏まえて、梁啓超の進化論への関心とダーウィン及びその学説への高評価は、同時期日本の思潮を注目していたことによるものであると考えられる。

同時期に刊行されたダーウィン関係の書籍については、五島清太郎（1867-1935）の『ダーウキン氏自伝』（敬業社 1891年）と三宅驥一¹⁵⁾の『ダーウキン』（民友社 世界叢書、1896年）も挙げられる。五島による『ダーウキン氏自伝』はフランシス・ダーウィン（Francis Darwin、1848-1925）が編輯したチャールズ・ダーウィンの自伝から抄訳したものであった（五島 1891: 1）。

三宅驥一の『ダーウキン』に関して、初めての日本人によるダーウィン伝と評価されていた（上野 1960a: p. 14）。だが、この『ダーウキン』の内容は僅かであるが、立花訳にある伊藤篤太郎が著した序文と重なっている箇所が見られる¹⁶⁾。三宅の『ダーウキン』は、ちょうど立花の全訳と同年に出版され、しかし、三宅のダーウィン評伝は『生物始源 一名種源論』よりも半年ほど遅れて公刊された。

三宅は作品の中で、立花の訳本と重なっていた部分を傍点で標記していたが、具体的に参考や引用は明示されていなかった（三宅 1896: 6）。刊行の時期から考えてみれば、三宅の『ダーウキン』は立花の訳本を参考にしたことが強く推測される。そして、梁啓超のダーウィン評伝は、以下の表で示したように、立花と三宅両氏の作品に依拠して完成されたものに他ならない。

14) 梁啓超・歐陽紅（2008）『新民叢報』第六号（1902年4月22日）「圖畫」を参照。

15) 三宅驥一（1876-1964年）、同志社大学理科大学を卒業して、帝国大学理科大学植物選科に入学した。卒業の後に、アメリカのコネル大学で博士号を取って、ドイツのボン大学において植物研究に従事していた。日本へ帰朝してからは、同志社大学普通部の教師となり、一年後に、帝国理科大学より理学博士の学位を授与され、後に帝国大学農科大学の教授となった。篠遠（1965）三宅驥一略歴より作成。

16) 表五を参照。

表三 『ダーウキン』、「天演学初祖達爾文之学説及其略伝」の比較

『ダーウキン』	「天演学初祖達爾文之学説及其略伝」
<p>チャールズ・ダーウィンは、千八百〇九年二月十二日、英国シユルズベリーに於て、初めてこの世の光を見たり。而して米国大統領として、名高き、アブラハム・リカルン、英国の名相グラッドストーンも、同じくこの年を以て生まれしとは、亦奇なりといふべし。祖父エラスマス・ダーウインは、醫師にして傍ら詩を作るを好み、又博物學と學び、殊にその著書スーゴミヤは、傑作として、世に稱せられたり。父はルバルト・ダーウインと云ひ、エデンボロ、ライデン、等にて醫學を修め、独逸に遊びたる後、田舎に退きて、醫を業とせり。(略)</p> <p>千八百十七年彼らが九歳の夏、其最愛の母は病魔の為に犯され、空しく黄泉の客となりぬ。(略)</p> <p>同年の春より、彼は郷里の小學に入りぬ。彼の才智能く衆童を超越る能はさるのみならず、却りて常に其の妹カサリンの後に瞠若たりき。然れども金石、草木、昆虫、魚介の類を集むるを以て、無上の樂となしたるは、彼れが他日博物學者たるの資格を、既に此時に於て備へたるなり。(略) <u>三宅驥一『ダーウキン』、第一章「少壯時代」</u></p>	<p>達爾文名查理士羅拔(Charles. Robert. Darwin.) 英国人也。生於一千八百零九年。與美國前大統領林肯英國前大宰相格蘭斯頓同歲生。論者稱其年為人道之福星。其祖父埃拉士瑪士 Erasmus Darmin 以醫學及博物學有名與時。與植物變遷之跡。頗有所考究。父名羅拔。世其醫學。</p> <p>達爾文九歲喪母。其幼年在小學校也。才智無以逾人。校中功課。常出其妹之下。惟好收集昆蟲草木金石魚介等以為樂。蓋其博物學大家之資格天然授也。梁啓超「天演学初祖達爾文之学説及其略伝」(『合集』文集之十三より、p13) 三宅驥一『ダーウキン』、第一章「少壯時代」を摘記・要約</p>

下線は引用者による

表四 『生物始源 一名種源論』、「天演学初祖達爾文之学説及其略伝」の比較

『生物始源 一名種源論』序	「天演学初祖達爾文之学説及其略伝」
<p>十六歳にして、蘇格蘭エジンボロー大學校に入り、後、ケムブリッジ大學「クライスト、コレシシ」に転じ、教授ヘンズロー氏の薫陶により、博物學を以て身を立てむとの志望を懷き、一千八百三十一年、同大學を卒業し、七年の後、「マスター、オヴ、アーツ」の學位に昇進セリ。時に英國政府に於いて學術獎勵の爲め、探検船を海外に發遣し、汎く世界各地を周遊せしむるの〇あり。ダウキン氏は此好機會に遭遇し、幸に教授ヘンズロー氏の信任を受け、遂に博物學者として、凜船ビーグル號、乗組の一員に加はるとを得たり。時に年甫で二十二。於是乎、一千八百三十一年十二月二十一日、英國デウォンポート港を發し、南亞米利加に渡航し、世界各地を遍歴するを凡そ五年にして、英國に帰れり。氏は旅行中、大に見聞を弘め、闡發するところ亦勘からず。日ならずして数多くの論文を出版し、巍然として英國學術社會に頭角を顕し、遂に倫敦皇立學士會院の會友に選挙せらる。居るを幾もなく、従妹なるエムマ、ウェットドを娶り、一千八百四十二年、ケント州ベックンハム附近なる、一小村に居をとし、以て永住の地となす。然りと雖とも。ダウキン氏は有望な學士なり、十九世紀の偉人なり。豈に功成り名遂げて、獨りその身を休養し、餘命を樂む者ならんや。蓋しその一小村に閑居せるは、〇に五年間に於て、その創見せる一大新説を、鍛鍊琢磨せむが為なり。猶は大鵬の將に勇飛せむと欲して、一たび翼を收むるが如く、氏は閑靜の地に在りて、徐に世界周遊中、その腦裡に胚胎せる一だい學理を涵養し、孜々として更に其志を弛緩せしむるとなる。立花銃三郎『生物始源 一名種源論』序文 p3、5</p>	<p>十六歳入蘇格蘭之埃毡保羅大學。復更入琴布列大學。為教師亨羅所器重。受其熏陶。慨然有立偉功於學界之志。千八百三十一年。卒業於大學。時英國政府獎勵學術。特派一探險船於海外。周航世界以資實驗。達爾文得亨士羅之保薦。遂得附所派之壁克兒船以行。時年僅二十二。是歲十月二十一日。船發濟物浦。直航南亞美利加。復偏歷澳大利亞洲等處。環航地球。五年而還。此五年內實爲其一生學問之基礎。一切實驗智識。皆得於是。歸國之後。首著『壁克兒航海日記』一書以公于市。聲價籍甚。不數月而諸國翻譯殆徧。後陸續著『壁克兒航海之地質學』『珊瑚島之構造及分布』等書。於是博物之名大噪。被舉為國學會院名譽會員。千八百四十二年。遂去倫敦。卜居於京特省附近之一村落。屏絕塵俗。潛心濂慮。將航海五年內所蒐之材料所悟之新説。整齊之鍛鍊之。蓋其精心毅力。務求真理之極則。不敢自欺。不肯急功近名以取譽於世。殆欲積二三十年之力。成一滿志躊躇之大著述。或至身后乃始布之。其眼光之偉大有如此者。梁啓超「天演学初祖達爾文之学説及其略伝」、p13。立花銃三郎『生物始源 一名種源論』序文 p3、5 を摘記・要約</p>

下線は引用者による

表五 『生物始源 一名種源論』、『ダーウキン』、『天演学初祖達爾文之学説及其略伝』の比較

『生物始源 一名種源論』序	『ダーウキン』	『天演学初祖達爾文之学説及其略伝』
<p>茲にウェールス出身の少壯博物學者に、アルフレッド、ラッピル、ウェアレスと呼べる人あり。嘗て有名なる博物學者ベーツ氏と共に、南米アマゾン河畔を探究し、珍種奇品を創見して、大に名聲を博せり。ウェアレス氏は南米より帰るの後、英國に留ると値に二年にして、再び動植物を採檢せむと欲し、單身マレー群島に渡航し、諸島を遍歴すると数年、忽然として解悟する所あり。謂らく、凡そ動植物には種々の變を發顯するもの多きとは、余が多年、南米及マレー諸島に於ける、實驗に徴して明なり。之に据て考れば、種は變化すべきものにして、不變不易のものに非ざるや、亦知るべきのみと。一千八百五十八年、遂に一篇の論文を起草して、遙に之を親友なるダウキン氏に送致し、當時、英國學術社会の領袖なる、サーチャールスライエル氏と協議して、世に公布せむとを請へり。ダウキン氏はウェアレス氏の論文を讀して、己が多年、潛心研窮せる持論と、偶然暗合せるを驚歎せり。若しダウキン氏をして、少量の一人ならしめば、他人の爲め、その多年焦慮せる、一大新説を奪はれむとを恐るゝの餘り、陰然、私に不公平の所置をなせしやも、未だ知る可からず。然るに氏の胸裡は、皎々たる明月の如く、一點たりと雖とも、嫉妬の妖雲あるを觀ず。氏は直にライエル、及サー、ジュセフ、フッカー兩先輩に告ぐるに、此事を以てせり。兩氏は多年ダウキン氏の親友として、兼て能くその持論を聞知せるのみならず、亦その成功を補翼せむと期せり。於是乎、ライエル、フッカー兩氏は、ダウキン氏に勸告するに、その新説を鈔録して一編となし、ウェアレス氏の論説と共に、之を世に公にするの可なるを以てせり。其結果として、ダウキン氏、ウェアレス兩氏の論文は、一千八百五十八年七月一日、生物學の中心なる、英國倫敦林娜學士會に於て朗讀せられたり。爾後、ダウキン氏、ウェアレス兩氏の交情益々親密にして、長幼相讓り、〇もその功を專にすることをなし。實に近世學者社会の美談なり。ダウキン氏、ウェアレス兩氏の論文、一朝、林娜學士會に於て朗讀せらるゝや、學者社會に忽ち大波瀾起り、或は是れ十九世紀に於ける、一大新見なりと賞讃するものあり。或は採るに足らざるの、妄想説なりと排斥するものあり。甲論乙駁、底止する所を知らざりしと雖とも、ダウキン氏は更に多年蒐集せる材料を基礎とし、氏の宿論を敷衍して「オリシンオヴ、スピーシーズ、パイ、ミーンズ、オヴ、ナチュラル、コレクション」と題し、一千八百五十九年十一月、遂に此書を發刊する立花銚三郎『生物始源 一名種源論』、序文 p5、8 より引用</p>	<p>そはウェールス出身の少壯博物學者にアルフレッド、ラッセル、ウオレースと呼べる人あり。千八百四十八年二十四歳にして、有名なる博物學者ベーツと共に南米に航し、アマゾン河畔、ブラジル深林を採檢して、珍種奇品を得、歸國の後「アマゾン及びニーグロ河畔の旅」なる書を著して、大に名聲を博せり。ウオレース英國に止ること二年にして、再び熱帯生物の採檢を思ひ立ち、單身マレー群島に航し、諸島を遍歴すること数年、忽然解悟する所あり、謂へらく、凡て動植物に種々の變化を發顯するもの多きは、余が南米及びマレー群島に於る實驗に徴して明かなり、之に由りて考ふれば、動植物の各種變化すべきものにして、不變不易のものに非ざるや亦知るべきのみと。千八百五十八年遂に一篇の論文を起草して、マレー群島より遙に之を親友なるダウキンに送り、當時英國學術界の領袖チャールス、ライエルと協議して、世に公にせん事を請へり。ダウキンは此論文を一讀して、己れが多年潛心研究せる持論と暗合せるを驚歎せり。若しダウキンをして少量の人ならしめば、他人の爲めに其多年焦慮せる一大新説を奪はれん事を恐るゝの餘り、陰然私に不公平の所置をなせしやも知るべからず。然るに氏の胸中は、皎々たる明月の如く、一點の妖雲あるを觀ず。彼れは直にライエル及びフッカーの先輩に告ぐるに此事を以てせり。兩氏は多年ダウキンの親友として、兼て能く其持論を聞知せるのみならず、亦其成功を補翼せん事を期せり。是に於て乎兩氏はダウキンに勸むるに、其新説を鈔録して一編となし、之を世に公にするの可なるを以てせり。其結果として、ダウキン、ウオレースの論文は、千八百五十八年七月英國生物學の中心なる倫敦林娜學士會に於て朗讀せられたり。後ダウキンは更に多年蒐集せる材料を基礎とし、其宿論を擴張して、種源論と題し、千八百五十九年十一月、遂に此書を發行するや（略）三宅驥一『ダーウィン』第四章「ダーウキンの閑居」p106、108。立花銚三郎『生物始源 一名種源論』序文 p5、7 と一致</p>	<p>不圖事與心違。千八百五十年、達氏之知友和理士。忽自南美洲寄一稿於達氏。請其商於先輩碩學黎亞兒氏而刊布之。達氏一讀其文。恰與己十年來所苦思力索。蓄未發之新説。一一暗合。若在器量跼小者流。或不免爭名譽。起嫉忌。而思有以壓抑之湮沒之。亦未可知。乃達氏腦中。皓皓若秋月。曾無半點妖雲。直攜其稿以示黎亞兒富伽兩前輩。此二人者。皆達氏之親交。而深知其平生所研究所懷抱者也。乃共勸達氏。使急敘次其新著。一並布行。達氏乃始出其新論之大略。與和理士之書。同宣布之於倫敦林娜學士會。實一八七五年七月一日也。此兩論一出。全國學者耳目爲之聳動。或嘆爲精新。或斥爲誕妄。評論沸騰。不知底止。達氏乃益蒐其材料。緯其理論。敘次成編。所謂種源論者。遂以一八五九年十一月於世。立花訳（の序文伊藤作）と三宅兩者の文章から摘記・要約</p>

下線は引用者による

以上は立花、三宅、梁啓超三者の作品からダーウィンの略歴について叙述した部分を抜粋したものである。冒頭で梁啓超はダーウィンの著書 *On the Origin of Species* を「種源論」と翻訳したが、これは立花訳本の副題をそのまま転用していた。そして、この抄訳はまさしく梁啓超独自の日本語書籍の読書方法を実践し、完成されたものと言えよう。

抄訳について、梁啓超のテキストには明らかに誤訳した内容が確認できる。ビーグル号の発地は、立花訳では「Devonport」を「デウォンポート」と音訳しており、梁の抄訳では「濟物浦」¹⁷⁾と訳されている。この誤訳は梁が「デ」と「ヂ」の区別ができなかったことによる誤訳によるものと考えられる。恐らく、梁啓超を含めた日本語学習者が日本語の書籍を読む際に、仮名の読み取りの間違いが起きやすいことによることである。

日本文は漢字が七、八割を占める。漢字を使わないでもっばらカナを用いるのは、接続と助詞などにすぎない。その文法は、実字を必ずフレーズの冒頭に、虚字を末尾にもってくる。こうした決まりに沿ってひっくり返して読み、普通に使うカナの接続詞・助詞を書き出しておき、よく見て覚えるようにしておけば、日本語の書物をすらすら読むことができるようになる¹⁸⁾。

この発想則ち梁啓超の日本語文献の読書経験をまとめた『和文漢読法』¹⁹⁾の筋道である。しかし当時日本語学習者からはこの『和文漢読法』への評価が芳しくない。周作人(1885-1967)が梁の日本語速成法を次のように批判していた(李海 2014: 38-40)。

梁任公が、『和文漢読法』を著したのは何年かはっきりしないが、いずれ庚子(1900)のごろだったろう。すでに三十年余りにもなるのに、その影響は今なお絶大であって、一方で日本語の習得を奨励しながら、一方では誤解の種をまき日本語をひどく易しいものに想いこませる、といった二つの事態がいままで続く。(中略)

今日の日本文は、おそらく法律関係のものが一番読みやすいだろう。次は社会、自然科学で、文芸が一番難しい。さすが仮名一本槍の文章こそないが、なにしろ市井の細民間巷の婦女のことを書いているので、口語から入らなければ理解しかねるわけだ。

勿論『和文漢読法』を問題視していたのは周作人だけではない。蔡元培もその日記のなかで

17) 「濟」の中国語の発音は「jì」あるいは「jǐ」であるが、広東出身の梁啓超が広東語による影響で、「zài」または「zài」と読み「濟」に音訳したと思われる。いずれにしても「濟物浦」は、「Devonport」や「デウォンポート」から音訳したものと考えにくい。

18) 翻訳は岡本・石川・高嶋(2020: 127)をより引用。

19) 梁啓超とその周辺の関係者が共著した日本語速成法。李海(2014: 51-74)を参照。

梁啓超の速成法は「徹底的ではない方法」と記していた（李 2014: p. 35）。だが、梁自ら『和文漢読法』を推薦した「論學日本文之益」のなかで、彼が日本語速成法を考案した目的は日本語を十分に習得することではない明確に示した。「論學日本文之益」では梁が次のように述べていた（梁啓超・林志鈞 1936d: 81）。

わが中国では、西洋の学問を修めた人はもとよりごく少ない。翻訳書も軍事・技術の書物に偏っていて、政治・資生^{けいせい}などの根本的な学問については、ほとんど皆無である。いったい軍事・技術などの専門を学ぶには、ほかの学問をすべて棄てて習熟するのであれば、一流にはなれないし、たとえその学問を完成したにしても、国民全体にあまり大きな利益はない。だから学習する者が稀だし、開化に導くのも難しいのである²⁰⁾。

ここまでは梁啓超が「天演学初祖達爾文之学説及其略伝」に用いた訳本とその翻訳の方法について確認できた。梁啓超と三宅については、『ダーウケン』を刊行した民友社を所有する徳富蘇峰（1863-1957）との個人的な交際が指摘されている（石川2019b: 115）。立花銑三郎の訳本は、執筆のために参考したテキストとして用いられたこと以外に、直接的な接点は見られない。

三、『進化論』の受容及び「競争」と「遺伝」の示唆

日本へ亡命した梁啓超は、日本語文献を通じて全面的に進化論を信奉するようになり、「選択」と「淘汰」に対する抵抗が一掃され、進化論の法則を彼の作品で紹介した上、さらに当時の中国に応用すべきと主張するようになった。『新民説』の第四章では、もっぱら「優勝劣敗の理」を彼が主張する「新民」の証明に用いられた（梁啓超・高嶋 2014: 33-42）。

前述のように、来日後梁啓超のダーウィン評伝は、立花の翻訳と三宅の『ダーウケン』から抄訳したものである。ダーウィンによって明らかにされた進化の理論について、馬君武がコメント（馬君武1936: 1）したように、ダーウィンの著書よりその学説を理解しようとするには、博物学の知識と英語を理解する能力が要求される。その上重要な進化論の骨組みを要約するのも難易度の高い作業である。「新学小生」と自称する梁啓超（梁啓超・林志鈞 1936c: 17）にとって、全訳の骨組みを要約することは、さらに難易度の高い作業と言える。これは梁啓超がダーウィンの学説を抄訳する際に、立花の訳本を用いなかった理由と考えられる。

三宅のダーウィン伝記は立花の訳本と比べて、ダーウィンの経歴とその学説を200ページに及ばない小冊子に要約されている。第一章から第五章まで、ダーウィンが*On the Origin of Species*を書き上げられた経緯と見聞を述べていた。最後の第六章の中で、ダーウィンの理論が要約さ

20) 翻訳は岡本・石川・高嶋（2020）：125より引用。

れ、当時イギリス社会に与えた影響も述べられていた（三宅 1896: pp. 124-142）。そして「天演学初祖達爾文之学説及其略伝」に見られる生物進化論に関する記述は主に参考したのは、『ダーウキン』の第六章より抄訳されたものである²¹⁾。表四では、『天演学初祖達爾文之学説及其略伝』と『ダーウキン』の第六章が一致する内容を引用し、さらに進化論による梁啓超への影響を同時期の作品と比較して分析する。

表六 『ダーウキン』と「天演学初祖達爾文之学説及其略伝」

『ダーウキン』	「天演学初祖達爾文之学説及其略伝」
<p>凡そ家畜、若しくは培養植物の間に於て、其境遇の差により、異様の变化を為し、種々の變種を生ずるは事實なり。例今は家兎を見れば、其食料其飼ひ様等より、其毛色耳の長さ等に著しき變化を為し、数十数百の變種を生ずるも、是れ皆野兎の一種より變遷したるものなり。亦家鳩の變種を研究し、當時英國に鳩を飼ふ事流行しければ、自ら養鳩會の會員となりて之を調査せしに、即ち数百の變種あるを發見し、或ものゝ如きは全く別種の鳥なりと思はるゝものさへありき。而して此等は皆山鳩の一種により變遷したるものなるとは明かなる事實なり。（中略）</p> <p>夫れ如何にして斯の如き變種を生ずるか。凡そ生物の变化は皆固有より偶然に生ずるに非らず、漸々微小の变化より来るものなり。（略）</p> <p>人間社會に於ても、亦大に此淘汰を行ひたるの例少からず、昔古スパルタ人如きは、幼少なる男子間に於て大に淘汰法を行ひ、其体格の弱少なるものゝみを成長せしめ、以て其子孫を後世に残したるが為め、スパルタの男子は漸次に強力健骨に至り、遂に歴史上有名なる勇士たらしめたり。</p> <p>自然界に於ても亦人類が生物を畜養淘汰する如き淘汰ありや、自然界に於る生物内外の關係は、亦吾人が畜養せる生物を淘汰する如く淘汰せられゝを要するや、此れダーウキンの腦中を苦めたる疑問にして、かれは多年探究の末、其關係あることを發見し、以て自然の生物界に於て亦一大淘汰の行はるゝの理を明らかにしたり。そは生存競争にして生物の間、其最も境遇に適すものゝみ生存し、以て子孫を繼續し得るものなり、此れ名けて自然淘汰と云う。（略）三宅驥一『ダーウキン』第六章「進化説」p130、p131</p> <p>夫れ斯の如く生物は絶へず、生存上に於てお互いに相競争せざるはなし。蓋し生物たる物皆な食物に因ちて生存するものなれば、各自其生命を有する間は、常に其食物を求むることを務むるが故に、生存の競争は即ち食物の競争となり、而して生物は種類に従ひ、各自其食餌と生活とを異にするを以て、同種の生物中に起る食物競争は、異種の生物に比すれば、一層激烈なるべし。</p>	<p>凡動物之養飼者、植物之樹藝者、因其養之培之境遇不同、而無量數之變種起焉。譬之家兔、常飼以某物、而其毛可以變色、常養以某法、而其耳可以加長、如是者使之變百數十種不難焉。其實則皆自同種之野兔來耳。以是例之乃至養鳩者、達爾文最留心查鳩之種當時英國養鳩之風甚盛達氏為養鳩會會員細心查之有數百種變法云養金魚者、栽菊者、其理莫不如是、皆本由一簡單同類之種、而人工能使之變至數十數百未有已也。（略）梁啓超「天演学初祖達爾文之学説及其略伝」、p14、p15。三宅驥一『ダーウキン』第六章「進化説」、p127を摘記・要約</p> <p>此非不徒於物為然也。即人類亦有之。古希臘之斯巴達人、常用此方法、以淘汰其民。凡子女初生也、驗其體格、若有尪弱殘廢者、輒棄之殺之、無俾傳種、惟留壯健者使長子孫、以故斯巴達之人、以強武名於時、至今歷史上猶可見其遺跡焉。此皆所謂人事淘汰之功也。</p> <p>自達爾文此說昌明、各國教育事業大有影響。蓋今日文明世界、雖斷無用斯巴達野蠻殘酷手段之理、然知人之精神與體魄、皆能因所習而有非常之變化、以故近日學校、益注意於德育體育兩途、昔惟重教授者、今則尤重訓練、可以懸一至善之目的、而使一國人、使世界人共同之以進、積日漸久、而必可以致之、此亦達爾文之學説與有力焉者也。（梁啓超による案語、筆者注）</p> <p>所謂天然淘汰者何也、此義達爾文初不敢武斷其後苦斯力索、旁徵博較、然後尋出物競天擇之公理。（略）梁啓超「天演学初祖達爾文之学説及其略伝」、p15。三宅驥一『ダーウキン』第六章「進化説」、p130を摘記</p> <p>萬物同競争、而異類之競争、不如同類之尤激烈、蓋各自求食、而異類者、各有所適之食、彼此不甚相妨、虎之與牛也、狼之與羊也、鳥之與蛇也、其競争不如虎之與虎狼之與狼蛇之與蛇也、大抵愈相近、則其争愈劇烈、人之與魚鳥争、不如其與獸争之甚也、歐洲人與他洲之圖蠻争、不如歐洲各國自争之甚也、而其争鬥愈劇、則其所謂最適者愈出焉。</p> <p>夫所謂適者生存、非徒有其本體之生存而已、必以己之所優所以勝之智若力、傳於其子、子又傳其諸孫、如是久而久之、其所特有之奇才異能、益為他物之所不能及、於是其當初偶然所得之能力、遂變而為一定之才</p>

21) 表四を参照。

故に生存競争は、虎と牛、狼と羊、鳥と蛇との間よりも、虎と虎、狼と狼、蛇と蛇との間に於て一層激烈なり。これを人事に徴するも明かなり、麵包（パン）屋は肉店との生活競争は恐れざるも、其恐るゝは他の麵包屋の競争なり。（略）却て同業者の競争を恐るゝなり。かくの如くにして生存競争によりて、最適者勝を制して生存し、其性質を子孫に傳へ、子孫亦競争して變遷し、生物の變遷性と遺傳性とに加ふるに時間の力を以てして、生物は絶へず變遷し、進化するものなり。而して人類と雖も一個の生物たる以上は此法則に従ひ下等生物より進化したるものなり。而して更に古生物學者の力を借りて地中海に埋没せられる過去の生物を研究せば、明らかに其變遷の順序を知り、愈々此説の○ならざるを見るべし。三宅驥一『ダーウキン』第六章「進化説」p139、p141

性。訓致別為一種族而後已焉。此種之變遷所由起也。梁啓超「天演学初祖達爾文之学説及其略伝」、p16、p17。三宅驥一『ダーウキン』第六章「進化説」p139、p140を摘記・要約

苟明此理。則知現今庶物之樊然殺列者。其先必有所承襲而來。若深究其本質。必有彼此相同之痕跡。可以尋得者。其最始必同本於一元。而今之生物界。不過循過去數十萬年自然淘汰之大例。由單純以趨於繁蹟而已。即吾人類。亦屬生物之一種。不能逃此公例之外。故達爾文據地質學家所考究地下層石內之古生物。察其變遷進化之順序。以著所謂人祖論 The Descent of Man 者。於一千八百七十一年出版。以明人類亦從下等動物漸次進化而來。梁啓超「天演学初祖達爾文之学説及其略伝」、p14、18。三宅驥一『ダーウキン』第六章「進化説」p140を摘記・要約

下線は引用者

具体的に梁啓超が訳出した部分は、自然淘汰と人為淘汰及び証明する記述である。しかし、自然淘汰に関しては、梁啓超の抄訳はともかく、三宅驥一にも自然淘汰の事例が挙げられてない。代わりに生物変異の説明を用い、家畜化に成功したウサギや鳩の例が挙げられている。この変異体と人為的な選択を組み合わせることによる結果が、三宅テキストと梁啓超の抄訳の中で、進化論を成立させた実証的な事例とされていた。実際、「自然選択」の説明にダーウィンも問題を抱えていたのであった。「種の起源の背後にはどんな力が働いているのだろうか？どんな推進力が、荒れ狂う種形成の小川を介して、そう、たとえば一三種類のフィンチの進化をもたらしたのか」（シッタールト・仲野徹・田中文 2018: 60）。さらに、シッタールト（2018: 62）は、ダーウィンが自然選択の説明を引き出す手掛かりは、トマス・ロバート・マルサス（Thomas Robert Malthus, 1766-1834）の論文から手がかりを見つけたと指摘した。

マルサスは1798年に匿名で、『人口論』（*An Essay on the Principle of Population*）と題した論文を発表した。『人口論』の中でマルサスは、人口の成長は必ずそれを養う資源の成長を上回ると論じた。したがって、人口の増加につれて、資源は少なくなり、人間同士の間で争いは激しくなっていくことは『人口論』を成り立たせる論説である。この限られた資源は人口の本質的な増加傾向に追いつかないという状況において、人口の自然的な傾向には必ず欠乏が伴うと示唆されている（シッタールト・仲野徹・田中文 2018: 62）。

こうして「人口」と「資源」或いは食糧と釣り合わせると、生き延びたものたちは、一つの飢饉から次の飢饉へというサイクルを始めるということはマルサスによって開示された「自然選択」を説明する方法である（シッタールト・仲野徹・田中文 2018: 62）。これを受けてダーウィンは「自然選択という状況のもとでは有利な変異体が生き残り、不利な変異体が死に絶え、その結果、新しい種が形成されるのだ」と論じた（シッタールト 2018: 62）。さらに、梁啓超が参考にした三宅の作品において、マルサスの『人口論』の骨子は、ダーウィンに刺激を与え

たと指摘している（三宅 1896: 126）。

シッタータ（2018: 62）によれば、ダーウィンの主要な説の骨組みの要約は、以下の通りである。

動物の繁殖の際には親とはちがう変異体が生まれる。同種の個体同士はつねに、限られた資源をめぐって争っている。たとえ飢饉などが起きて、こうした資源が枯渇した場合には、新しい環境によりよく適応できる変異体が「自然選択され」、環境に最もうまく適応できるもの、つまり「適者」が生き残る。（中略）生き残った動物同士が繁殖して自ら仲間を増やすことで、同じ種の中で進化が起きる。

梁啓超の『人口論』受容は、「中国史上人口之統計」中でマルサスの観点が言及されたがことから、梁は『人口論』についてある程度の情報を把握していたと考えうる²²⁾。さらに、『新民説』の第四節に、「天演、物競のお公例」の事例から確かめることができる（梁啓超・高嶋 2014: 34-35）。

人類はいやおうなく互いに接触し、交流し、競争するようになった。いったん接触、交流、競争が始まると、たちまち盛衰の運命が明らかになる。闘蟀 [コオロギを戦わせる遊び] を見てみよ。百匹のコオロギはそれぞれ自分の籠にいるときは雄々しいが、一つの籠に入れてしまうと、一日で六、七割が死に、二日で八、九割が死に、三日経って残っているのはわずか一、二匹しかない。残った一、二匹は必ずそのなかで最も強いものである。ということは、少しでも弱いものは〔生存が〕危ぶまれるのである。

文脈から見れば、この記述で述べられていたことは、生物はお互いに接触、後に限られた空間をめぐり競争が始まる。結果としてもっとも強い方が生き残るという内容であった。『新民説』で梁啓超が挙げた「天演、物競のお公例」は、明らかにダーウィンがマルサスの学説を援引して、考案した「自然選択」の概念を依拠したものである。

ただし、ダーウィン自身は、「競争」によって導出された「自然選択」だけを進化の要因と限定していない。後天的に獲得した形質の遺伝も進化につながる要因の一つであると認めていた（八杉 1994: 11）。

『種の起源』が発表された後、当時のヨーロッパで引き起こした人類の起源を含めた論議は、いくつもあった。その中で *The North British Review* で取り上げられた、フリーミング・ジェンキン（Henry Charles Fleeming Jenkin, 1833-1885）という数学者がダーウィンに疑問を發

22) 梁啓超・林志鈞 1936e: 35を参照。

し、白人の男性が黒人の住む島に漂着したと想定し、ダーウィンに問題を提起した（シッタータ 2018: 72）。ジェンキンは「白人男性」を黒人の住む島の変異体と仮定し、「白人男性」と「黒人の妻」の間で、何人もの子供が生まれたとしても、その子供が受けつく「遺伝的要素」は半分しかない。そして、孫ひ孫が獲得した遺伝的要素はそれぞれ四分の一と八分の一になり、その子孫が生まれることにつれて、「白人男性」の遺伝的要素は薄まる。結果的に、変異体としての「白人男性」の要素は減衰を避けられないことはジェンキンの疑惑であった。

『人口論』で論述された人間社会においては、資源をめくり競争するような関係がある。さらにダーウィンの『進化論』によって、このようなメカニズムは生物の間に普遍性のある法則であると証明され、さらに、生存において競争の必要性を再度に強化したと言える。「白人」の視点からは、ジェンキンがダーウィンに提出した質問のように、その学説の正確性に、更なる説明を求めながら、「白人」という種族の存続に危機感も生じた。一方、梁啓超を含む非「白人」の視点は、国際関係における競争的な背景が説明できる理論であると同時に、その境遇を改善する方法論及び「進化」と「退化」不変ではない、そして「競争」あるいは「生存競争」の重要性が提示されたと言える。

「白人」と「黒人」をめぐる議論のように、ダーウィンの学説において、もう一つ「進化」へ繋がる概念は「遺伝」であった。三宅の記述において、進化に至るまでの過程について以下のように、まとめられている。「生存競争によりて、最適者勝を制して生存し、其性質を子孫に傳へ、子孫亦競争して變遷し、生物の變遷性と遺傳性とに加ふるに時間の力を以てして、生物は絶へず變遷し、進化するものなり」（三宅 1896: p. 140）。梁啓超が参照した伊藤篤太郎の序文では、「進化説に於ける、輒近学者論議の焼點とも稱すべきは、遺傳の原理なり」と強調していた（立花 1896: p. 17）。両者の作品を目に通した梁啓超も、進化の前置き条件としての「生存競争」の以外に、遺伝も不可欠な一環であることが共有されていた。

遺伝の理論に関して、ダーウィンは『種の起源』が刊行された九年後に、『飼育動植物の異変』（*The Variation of Animals and Plants under Domestication*）において、ラマルキズムに基づいたパンジェネシスの仮説が公開された（渡辺 2015: 91）。しかし、ダーウィンが自ら提出した遺伝の仮説は、その従弟であるゴールトンが立証するために行われた実験を行われ、実証できなかったという結果が出された（渡辺 2015: 92）。

一方、ダーウィンの仮説が公表される前に、遺伝の仕組みについて、すでにメンデル（Gregor Johann Mendel, 1822-1884）が行われた実験によって数学的な法則は明らかにされていた。また、1900年に三人の研究者により、再度に発見された（渡辺 2015: 98）。

だが、ここで注意すべきことは、時間差と翻訳の問題である。確かにダーウィンの仮説とメンデルの実験は、いずれも本論で取り上げる梁啓超の作品より十数年も早く公開された学説であった。梁のダーウィン評伝が掲載される二年前に、メンデルの実験結果も再発見されていた。けれど、伊藤篤太郎の記述からも窺えるように、少なくとも立花銑三郎と三宅驥一の作品が刊

行される1896年までに、遺伝の法則に関する定説に関する翻訳・抄訳の著書は限られていた。当然日本語の翻訳を経由しなければならない梁啓超にとって、遺伝に関する記述も必然的に限られていたのである。遺伝の仕組みに関する情報は限られたとは言え、梁啓超の進化論に関するテキストにおいては、遺伝に関する記述が窺える。

『新民説』の第四節の中で梁啓超は「白色民族」を例にその見解を付した。彼は「白種人」に、動的・競争的・積極的の要素が備わって、ゆえに「文明」を興すことができと提唱した（梁啓超・高嶋 2014: 38）。梁啓超によれば、白種人の勢力拡大は「僥倖ではなく、民族の優秀性がそうさせた」という結論に至った。この結論を得るに至るまで、梁は「白色民族」の系譜と盛衰を概略的に整理しながら、当時最も勢力を拡大できた白種人民族である「ゲルマン人」と「アングル・サクソン人」が成功した理由が述べられていた。

では、梁啓超は「ゲルマン人」と「アングル・サクソン人」が最も成功できた理由を要約してみよう。

「白色民族」が他の「民族」を勝る理由として「動を好む」と挙げられている。他の「静を好む」人種に比べて、「白色民族」は「競争を辞めさせない」、「競争」の法則によって選出された強い白人は進化に成功した人種とされる。しかし、「競争」は絶えずに前進する行為であり、「白色民族」から派生するラテン、スラヴ、チュートン〔ゲルマン、アングル・サクソン〕の諸民族は、次第に「白色民族」の間での「競争」が展開される。そして、「白色民族」の中から選出された「チュートン人」はなぜ優れた民族になれたのは、「ゲルマンの森林中の一蛮族であったときには、個人の独立自由の気概を子孫に伝えて失わなかった」によることである（梁啓超・高嶋 2014: 40）。個人の独立自由の気概を持つ「チュートン人」は、さらに、ローマ文化に影響され、両者が融合し、独特な性質を持つ民族が形成される。「アングル・サクソン人」が他の「チュートン人」を勝る理由としては、彼らは「白色民族」が「他の民族」との「競争」の中で、獲得した特質が伝えられていて、その上、成長の初期の段階から、家庭と学校で受けた訓練によって、より自立で規則を遵守するように養成されていたのである。

梁啓超の「アングル・サクソン人」の勢力拡大を立証する記述では、「遺伝」という概念は明確に表れていなかった。だが、「チュートン人」の子孫が引き継ぐ「個人の独立自由の気概」の観点は、漠然とした記述であったか、「遺伝」から派生の受け継ぐという意味が含まれていたと言えよう。

こうして「競争」を経て伝えられた優れた性質を持つ「白色民族」は、勢力拡大を拡大した要因が「僥倖ではなく、民族の優秀性がそうさせた」と結論づけた（梁啓超・高嶋 2014: 41）。だが、梁啓超がまとめた「アングル・サクソン人」の勢力を拡大する理由の中で、教育訓練という外部要因が内包されている。

もう一度『ダーウキン』と「天演学初祖達爾文之学説及其略伝」の比較に戻りたい、三宅は

人類歴史上行われた個体間の競い合いの事例として、スパルタの例²³⁾を挙げた。勿論、梁啓超抄訳もこの事例を抄訳した。しかし、スパルタの例に続いて、梁はスパルタ人の事例にこのようにコメントしている（梁啓超 1936c: 15）。

文明世界の今日では、スパルタ人が行った選択の方法、野蛮且つ残酷な手段を用いる理由もない、しかし、人の精神と体格は皆訓練によって非常に変化のあることを知り、以て近々の学校では、益々道徳教育と体育に気を配るようになった。

梁啓超の進化論は人間社会に適用すべく説明は、「民族」の発展において、絶えずに「競争」をすること、さらに、訓練・教育による「人格を養う」ことも不可欠な外部からの条件である。なぜならば、ローマ帝国を築いたラテン人は、失敗に終わった原因を「人格を養わなかった」と帰結している。梁啓超の思考においては「自然淘汰」は自然界の客観的な事実であるが、訓練という後天による働きの影響も、人間の進歩は促進されることに繋がると述べていた（梁啓超・高嶋 2014: 40）。

これは明らかに生物学の知識を援用し、人間社会に比類した社会進化論の論説である。だが、このことも梁啓超が生物進化論から読みとったメカニズムであるとも言える。第一章で示した『目録』の自然科学の部門に、遺伝と進化に関する書籍から見られることは、生物進化論を受容してからの延長と言える。

『新民説』に見られる「白色民族」、「アングル・サクソン人」の成功を立証する記述は、明らかに「競争」と「遺伝」の概念を表している。しかし、「遺伝」は前述のとおり、メンデルの実験によって明らかにされた法則は、時間差や翻訳によって、梁啓超が参考できる資料は限られていた。『新民叢報』に掲載された「余之死生観」の中で、梁啓超は「遺伝」用いて、その死生観について語っていた（梁啓超・林志鈞 1936f: 3）。具体的に「遺伝」の法則と子や子孫に何が「遺伝」されるのであるか、その記述は依然として曖昧な表現であった。だが、「遺伝」の結果として、梁啓超は、明確に「国民心理、社会心理」は「遺伝」によって形成されたものであると述べられていた。

しかし、このような生物学の知識を援用する行為は、梁啓超だけに限定される行為とは言い難い。前述のように、立花銑三郎は哲学者の視点から、博物学である進化論の思考は、哲学的思考を推進する理論として受け取られていた。また、三宅驥一は生存競争の説明に、上手な医者と下手な藪医者、廉価な商店不廉の商店、上手な職工と下手な職工などの例を挙げている（三宅 1896: 135-136）。後に植物学者として活動する三宅も、進化論によって論述された内容を、人間の活動に適用し、社会を推進する理論として受け取っていた思考も見られる。

23) 表六、または、三宅 1896: 130と梁啓超 1936c: 15を参照。

この恣意的な学問活動は、正に内井惣七氏が指摘する「兼業」活動と言えよう。内井氏は、哲学と科学の分業まだ明確にしていない19世紀以前に、「科学者が科学に関する哲学的な考察を行い、哲学者が科学研究を行うことも珍しくない」（内井 1995: 7）。現在では、学問活動はそれぞれ専門訓練を受けた専門家による行為とされている。だが、大学アカデミズムが形成される以前に、思想家、学者、知識人による「兼業」活動は各分野において行われていた知的活動であった。

19世紀から20世紀にかけて、ダーウィンが引き起こした生物学の大流行のように、ヨーロッパの思想と学術は、中国と日本を含む東アジアに持ち込まれた。このヨーロッパ発の学術と思想は、既存の東アジアの学術分野に適用できない、あるいは現代のアカデミズムの視点から、批判すべき「学問活動」とされる。けれど、思想史と学術史を考察する際に、現代的な「分業」また確立されていない時代で行われた「学問活動」について、あらかじめ想定された研究方法による分析は、必ず適切な方法とは言い難い。

日本にわたってから、梁啓超はスペンサー思想に影響され、さらに明治後期の進化論熱によって、「択種留良」への違和感がなくなり、ダーウィンの学説を完全に受け入れたと言える。さて、ダーウィンの学説によって形成されたと言える学術分野、生物学について、梁啓超はどのように受け取っていたのであろうか。一例として、彼が中国科学社で行った講演を見てみよう（梁啓超・林志鈞 1936g: 20）。

生物学は自然科学の一つの科目に過ぎないが、彼（生物学）が果たした役割は自身（発展）や自然科学だけにとどまらず、彼は強健な息子を、その名は社会科学という（学科）を生み出した。彼は生物界共通の生存法則、遺伝・適応・変質・競争・淘汰・互助（相互作用）・進化などの法則を人間の生活に類推できた。どのように個性を発展させるか、団体を存続させることに、次々と「必然性に近い」法則を発見した。それによって人間社会はどのように組織していくか、その変化は歴々と探求できる。社会学が成り立たせた所以は、生物学が基盤を構築した。社会学を生み出しただけでなく、凡そ人事と関わる諸々学科、経済学・政治学・宗教学・歴史学も彼から刺激を受けて、一切の研究方向を変えた。この五十年の間に、これらの学問はどのような形で、所謂「ダーウィンニズム」というものと交錯していた。勿論宗法で規制するか或は反駁を加えるか。しかし、いずれも彼（進化論）をほったらかすことはできなかった。例えるとすれば、まるで大きな蜘蛛みたい八本の足を伸ばして、あちらこちらに這って行く。各種の学問それにこそばゆい感じが止まらない。彼が生み出した息子社会学、この息子さんは同類の学問政治学・経済学・歴史学等々を一つの連邦国のように集合し、それは社会科学と言ひ、自然科学全体と対抗できる身分を手に入れられた。さらに、（生物学は）自然科学の一部門の身分で、手を伸ばし社会科学全体に影響を及ぼしている。

この講演は、梁啓超が、社会科学は生物学から導出されることをユーモアのある表現で行った内容であった。梁は、生物学者の一見子どものような動植物を探究する行為は、意味の無い研究などではないと述べた。この生物学の研究に対する見地は、「天演学初祖達爾文之学説及其略伝」での生物学への評価とはほぼ一致している。また、生物学ないし進化論が明確にしたことは、人間を含めたすべての生物は進化を目的とする。進化論の法則はその発展方向を示す根幹的な理論であることは梁啓超の主張であった。多くの学科が生物学と進化論に対して反対や否定していたとしても、生物学が成立する以前に完成された諸多の学問は、その理論を再考せざるを得ない、学術研究においても進化論を適用すべきという梁啓超の考えであった。この生物学を高く評価する見解は、立花銃三郎が *On the Origin of Species* の翻訳に取り掛かった理由とは、同じものとは言えないが、生物学が一つの学術分野として成立した経緯、さらに他の分野を推進したという観点は、かなり高い関連性のあるものと見なすことができる。

結語

ここで梁啓超における進化論の受容について改めて整理してみたい。まず第一章において、梁啓超と進化論との接触は康有為の影響、および嚴復の『天演論』の影響から始まったことを確認した。康有為の「春秋三世説」が彼にどのような影響を及ぼしたか、という問題はあるが、『天演論』における「択種留良」への疑問から、日本語文献の影響によって、「物競天択」「優勝劣敗」の考え方を受け入れるに至った点が確認できた。この変化は、勿論中国国内に『天演論』の大流行によることであるが、明治後期のダーウィン熱による『種の起源』の大流行の影響でもあると考えられる。

また、ダーウィン学説が日本へ導入された歴史から、梁啓超が生物学進化論を受容するに至ったと考えられる参考文献を特定できた。梁の「天演学初祖達爾文之学説及其略伝」と立花銃三郎訳『生物始源 一名種源論』、および三宅驥一の『ダーウキン』を比較した結果、梁啓超が進化論を受け入れ背景は、彼の生物学の知識をある程度理解できたによることである。その智識は、立花銃三郎と三宅驥一作品に由来したものであることをあきらかにすることができた。「天演学初祖達爾文之学説及其略伝」は、梁啓超自らが日本語速成法を実践し、抄訳した結果であることも確認できた。

更に、『ダーウキン』の第六章で要約されたダーウィンの学説を、梁啓超の『新民説』に現れる進化論的思考について検討した結果、彼は生物学に関心を持ち、「競争」によって強者が選出され、その間に生まれ子孫「遺伝」で受け継がれた性質は、次に展開される「競争」において、種族の存続に繋がるに必要な性質と見出した。『梁氏飲氷室蔵書目録』の自然科学の項目から、梁啓超が「遺伝」のメカニズムについて、関心を示していることがわかった。「遺伝」された性質と、外部から獲得したあらゆる要素を「人格を養う」という訓練によって定着させ、子

孫へ伝えることで進化した「新民」が作り出せると梁は考えていたのである。しかし、「遺伝」に関する研究は、当時においては確実な学説はないあるいは梁啓超が参考できる翻訳作はない。既存の学説による「遺伝」に対する解釈が梁啓超にどのような影響を及ぼしたかについては、今後の課題である。

『新民説』において梁啓超が提出した「天演による」方法論がどのような妥当性を持つかという点については、大いに議論の余地がある。現在の視点から見れば、梁啓超の言論にある「新知識」の引用は、曖昧で誤解を招くものが少なくない。梁啓超が日本語文献から得た知識を報道活動において用いた手法は、明らかに自然科学の理論を操作した上で人間社会に当てはめていくものであった。

また、日本語文献を通じてダーウィンの学説を理解した一例から、梁は特定の人物・書籍に依拠するのではなく、断片的に内容を摂取する傾向が存在することがわかった。梁が摂取した「新知識」とそれによって刺激を受けた思考は、同時代の人々に影響を及ぼした。その「新知識」は恐らく日本語文献から汲み上げた可能性が高い。こうした情報を知識として実際に修得していたことに対し再検討を行う必要がある。そのため、梁啓超を取り囲む情報環境に対して綿密に調査を行う必要があろう。この作業を通して、近代日中間の思想的連鎖の一部を解明できると考えている。

参考文献

日本語

- シッタールタ, ムカジー (著) 仲野徹監修・田中文 (共訳) (2018) 『遺伝子 親密なる人類史』東京: 早川書房
- チャーレス, ダーキン (著) 立花銑三郎 (訳) (1896) 『生物始源 一名種源論』東京: 経済雑誌社
- フランシス, ダーキン (著), 五島清太郎 (訳) (1891) 『ダーウキン氏自伝』東京: 敬業社
- 右田裕規 (2009) 『天皇制と進化論』東京: 青弓社
- 夏目漱石 (2016) 『漱石紀行文集』東京: 岩波書店
- 丸善株式会社編 (1980-1981) 『丸善百年史: 日本近代化のあゆみと共に (上巻)』東京: 丸善株式会社
- 丘英通 (編) (1960) 『ダーウィン進化論百年記念論集』東京: 日本学術振興会
- (1960a) 上野益三「本邦における進化論移入史略」pp. 10-16
- 狭間直樹 (編) (1999) 『梁啓超 西洋近代思想受容と明治日本: 共同研究』東京: みすず書房
- (1999a) 村尾進「万木森々『時務報』時代の梁啓超とその周辺」pp. 37-75
- (1999b) 石川禎浩「梁啓超と文明の座視」pp. 106-131
- 胡適 (著) 吉川幸次郎 (訳) (1946) 『胡適自伝』丹波: 養徳社
- 溝口元 (2010年) 「日本におけるダーウィンの受容と影響」『学術の動向』15 (3) 公益財団法人 日本学術協力財団: pp. 48-57
- 佐藤慎一 (1996) 「梁啓超と社会進化論」『法学』59 東北大学法学会: pp. 1067-1113
- 坂元ひろ子 (2016) 『中国近代の思想文化史』東京: 岩波新書
- 三宅驥一 (1896) 『ダーウキン』東京: 民友社
- 山下重一 (1983) 『スペンサーと日本近代』東京: 御茶の水書房
- 篠遠喜人 (1965年) 「理学博士本学会顧問三宅驥一先生をいたむ」『染色体』60 染色体学会: pp. 1987-1988
- 朱琳 (2014) 「梁啓超における中国史叙述—「専制」の進化と「政治」の基準」(一) 『人文学研究所報』52: pp.

95-115

- 石川禎浩・挾間直樹（共編）（2013）『近代東アジアにおける翻訳概念の展開』京都：京都大学人文科学研究所
 ——（2013a）李冬木「天演から進化へ—魯迅の進化論の受容とその展開」pp. 83-118
- 船山信一（1999）『船山信一著作集』第六巻 明治哲学史研究 東京：こぶし書房
- 曾村保信（1963）「康有為の大同思想と人民公社」『アジア研究』10（1）アジア政経学会：pp. 1-26
- 竹内弘行（2008）『康有為と近代大同思想の研究』東京：汲古書院
- 渡辺政隆（2015）『ダーウィンの資産—進化学者の系譜』東京：岩波現代全書
- 渡辺正雄（1976）『日本人と近代科学—西洋への対応と課題—』東京：岩波新書
- 内井惣七（1995）『科学哲学入門』京都：世界思想社
- 李海（2014）『日本亡命期の梁啓超』神奈川：桜美林大学北東アジア総合研究所
- 梁啓超（著）・岡本隆司・石川禎浩・高嶋航（編訳）（2020）『梁啓超文集』東京：岩波書店
- 梁啓超（著）高嶋航（訳注）（2014）『新民説』東京：東洋文庫
- 梁啓超（著）小野和子（訳）（1974）『清代學術概論』東京：東洋文庫
- 鈴木貞美・劉建輝（共編）（2008）『東アジアにおける知的システムの近代的再編をめぐる』京都：人間文化研究機構国際日本文化研究センター
 ——（2008a）川尻文彦「進化と加藤弘之、巖復、梁啓超—進化をめぐる近代日本、中国間の概念の連鎖」
 pp. 137-156
- 挾間直樹（2016）『梁啓超東アジア文明史の転換』東京：岩波現代全書

中国語

- Charles Darwin（著）馬君武（訳）1936『達爾文物種原始』上海：中華書局
- 国立北平図書館（編）2005『梁氏飲冰室藏書目録』北京：北京図書館
- 蔣英豪（2006）「晚清「天演」、「進化」二詞的消長」『中国文化研究所学報』46：pp. 73-89
- 梁啓超（編）歐陽紅（編）（2008）『新民叢報』北京：中華書局
- 梁啓超（著）林志鈞（編）（1936）『飲冰室合集』上海：中華書局
 ——（1936a）「与巖幼陵先生書」『飲冰室合集』文集一
 ——（1936b）「論學術之勢力左右世界」『飲冰室合集』文集六
 ——（1936c）「天演学初祖達爾文之学説及其略伝」『飲冰室合集』文集十三
 ——（1936d）「論学日本文之益」『飲冰室合集』文集四
 ——（1936e）「中国史上人口之統計」『飲冰室合集』文集十
 ——（1936f）「余之死生觀」『飲冰室合集』文集十七
 ——（1936g）「生物学在學術界之位置」『飲冰室合集』文集三十九
- 邱偉雲（2015）『中国近代平等觀念の形成（1895-1915）』台北：新文豊出版公司

